ISSN 0287-9514

ESTUDIOS DE HISTORIA DE ESPAÑA

Núm. 19 Diciembre 2005

INDICE

Special Number : La Época Cervantes

Artículos

Hirotaka Tateishi, (Reflexiones) La obra literaria y su tiempo: La conmemoración del Cuarto Centenario del *Quijote* ..... (1)

Hiroshi Sakamoto, Una escritora laica que glosa el paternoster: Isabel Ortiz ..... (10)

Jitsuko Masui, Argel en el tiempo de Cervantes: A través de *Topografía e hitoria general de Argel* por Antonio de Sosa ..... (20)

Nota

Iku Hayakawa, La conquista de Mallorca por Jaime I con "Libre dels feyts" ..... (26)

Actividades de la Sociedad Japonesa de Historia de España ..... (41)

Indice, Núms. 1-18 (1983-2004) ..... (42)

Nota de redacción ..... (44)

Sumario ..... (45)

La edición de este número ha contado con la ayuda de la Embajada de España en Japón.

SOCIEDAD DE HISTORIA DE ESPAÑA

(Supeinshigakukai)

a/c Departamento de Estudios Hispánios

Universidad Provincial de Aichi

1522-3, Kumabari, Nagakute-cho, Aichi-ken, 480-1198 Japón

(Distribuidor : Ed. Soken, Kurume-shi, Fukuoka, 830-0038)

定価（本体1500円＋税）送料別

スペイン史研究

◆ 目　　次 ◆

特集＝セルバンテスの時代

〈特集論文〉

文学作品とその時代、そしてコメモレイション
—『ドン・キホーテ』出版400周年に考える
..... 立石博高 (1)

パテルノステルを注解した女
—スペイン黄金世紀における神秘主義と文学—
..... 坂本　宏 (10)

セルバンテス時代のアルジェ
—アントニオ・デ・ソーサ『アルジェの地誌と歴史』から—
..... 増井実子 (20)

〈研究ノート〉

『業績録』にみるハイメ I 世のマリョルカ征服
..... 早川　育 (26)

スペイン史学会のその後のあゆみ ..... (41)

『スペイン史研究』1～18号総目次 ..... (42)

編集後記 ..... (44)

〈特集論文・研究ノート〉西文要旨 ..... (45)

19

2005.12

スペイン史学会

創研出版・発売

文学作品とその時代，そしてコメモレイション

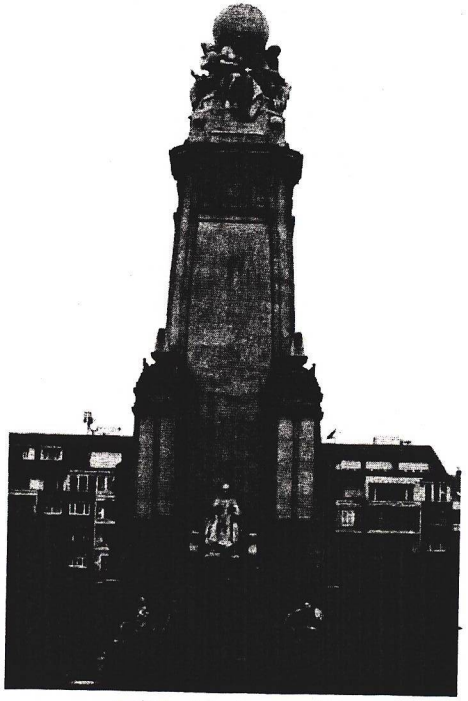
―『ドン・キホーテ』出版400周年に考える

立　石　博　高

はじめに ―『ドン・キホーテ』とその時代，そしてコメモレイション

名作『ドン・キホーテ』を著したミゲル・デ・セルバンテス（1547～1616年）が「近代小説の祖」とも「世界的文豪」とも言われて，文学世界できわめて高い評価を与えられていることは，周知の事実である[1]。2005年は『ドン・キホーテ 前篇』が世にでた1605年から400年目にあたることから，スペインでは「ドン・キホーテ400周年」と位置づけられ，国立文化コメモレイション協会を中心にしてさまざまな展示・シンポジウム・出版が行なわれており，我が国でもそれなりの規模で同じく400周年行事が組織されている[2]。

わたしは，この『ドン・キホーテ』に，「人間の想像力が生みだした最高の果実」であると最大の賛辞を文学者が与えることにとくに異存はないが，アメリコ・カストロ（1885～1972年，スペインの批評家・文献学者）に倣って寛容の精神を旨としていたような評価を与えたり[3]，さらにはホセ・ルベン・ロメーロ（1890～1952年，メキシコの作家・外交官）の「『ドン・キホーテ』は，民主主義と同義であるとも言える」といった評価が批判もなく紹介されたりすることについては[4]，歴史家の立場から違和感を感ぜざるをえない。もちろん，文学作品が作家の生きた時代と環境によって基底還元論的な意味で規定されると考えているわけではないが，作家がある時代と環境のなかで作品を生みだしている以上，作家とその時代＝環境との関係性を抜きに作品評価を行なうことは，時代錯誤に陥るおそれがあると考えるからである。ドピーコ・ブラックが言うように，「ミゲル・デ・セルバンテスは，決して17世紀初頭スペインの心配と不安と無関係ではなかったし，『ドン・キホーテ』はそれらをきわめて生き生きと取り戻し，繰り返し，変容している」[5]。そしてフェロスとヘラベルトが言うように，『ドン・キホーテ』を理解するには，「時代，歴史的脈絡，その作家の生涯と冒険」を知る必要があるのである[6]。それ故，アメリコ・カストロやホセ・ルベン・ロメーロの時代からさらに進んだスペイン近世史研究の諸成果を取り入れたうえで，あらためて作品を見る必要があるだろう。本稿第Ⅰ章ではまず，セルバンテスの作品が，グティエレス・ニエトの言うところの「カースト的身分制社会」の心配と不



写真①　セルバンテス記念碑

安，そして葛藤を色濃く反映していたことを指摘しておきたい。

ところでスペインは，ドン・キホーテ400周年をどのようなコメモレイション（記念＝顕彰行為）の年としようとしているのであろうか。のちのナショナルデーとなる10月12日の「アメリカ発見」が1892年まで祝われなかったように[7]，後述するごとく，『ドン・キホーテ』が本格的にコメモレイションの対象となったのも国民国家（ネーション・ステイト）形成が問題となる時代であり，『前篇』出版300周年の1905年であった。さらに『後篇』出版300周年が1915年にあり，セルバンテス没300周年が1916年に催されて，これらの結果，マドリードのスペイン広場に巨大な「セルバンテス記念碑」も建立された〔写真①を参照〕。現在，マドリードを訪れる人びとはこの記念碑を眺めて，スペインにとってセルバンテスと『ドン・キホーテ』の文学的価値がいかに高いかを知らされるのだが，果たしてこの記念碑のメッセージはそれにとどまるものであったろうか。本稿の第Ⅱ章では，1905年のコメモレイションの内容とこの記念碑に象徴されている事柄をあらためて問い直すことで，コメモレイションのもつ政治性を知ることになるだろう。

Ⅰ 『ドン・キホーテ』とカースト的身分制社会

ヨーロッパにおける近世社会は，中世以来さまざまに構成された職能組織と地縁組織が絶対王権のもとに上から階層序列的に編成されていることを特徴とする。しかも，こうした組織つまり社団がそれぞれの一体性を強く主張し，社会における序列を執拗に維持するために相互に蔑むといった心理構造の体系がつくられていたことから，近世社会は「侮蔑の滝」であったとも言われている。

セルバンテスも，こうした社団的編成原理に立つ社会，つまり身分制社会からその意識をまぬかれているわけではない。主人と従者の関係を頭と体の関係になぞらえて，ドン・キホーテはサンチョ・パンサに次のように述べる。「頭が痛い時には，体のほかの部分も同じく痛むということじゃ。すると，お前の主人であるがゆえにわしはお前の頭にあたり，お前は従士であるがゆえにわしの体の一部ということになるが，この道理に従えば，わしに降りかかる，もしくはこれから先，降りかかるであろう災難はお前にもつらいはずであろうし，逆にお前の苦痛はわしの苦痛でもあるはずだということよ」（『後篇』第2章）[8]。これに続くサンチョの「体の部分である手足に頭の痛みを感じる義務があるっていうなら，頭のほうだって手足の痛みを感じなきゃならねえはずでしょうが」，という言葉は，主人が主人のしかるべき務めを果たさない場合への鋭い風刺であろうが，頭と体という関係性そのものを断ち切る論理にはつながっていかないことに注意したい。『ドン・キホーテ』を読み進めれば一目瞭然だが，貴族（「戦う人」），聖職者（「祈る人」），平民（「耕す人」）といった諸身分がさまざまな場面で交錯するものの，彼ら（彼女ら）の地位はそれぞれに固定されており，彼ら（彼女ら）のあいだの敷居は厳然としてあるのである。それは，『模範小説集』の「ジプシー娘」の話に典型的に現れる。ここでは，ジプシー娘の純粋無垢な美しさは，最後にはカスティーリャ人貴族の娘であること，つまり高貴な血筋（linaje）に由来することになる[9]。サンチョが「バラタリア島の領主」になった話も風刺と笑いに満ち溢れているものの，結局，カーニバルの数日間のさかしまの世界のように終わり，サンチョと領民たちはつかの間の逆転からそれぞれの日常へと戻るのである（『後篇』第45～53章）[10]。

ヨーロッパの身分制社会における高貴な血筋は，平民たちの従事する職業にはつかないということを要件としていた。スペインの場合も同様で，「卑しい手職（oficio mecánico y vil）」への従事は貴族身分の喪失につながるとされていた。そうしたことが国内手工業の発展を阻むと批判されて，手職（oficio mecánico）を名誉あるものと宣言した王勅が出されたのは，18世紀後半の啓蒙専制君主カルロス3世の時代であった[11]。ちなみに，郷士（小貴族）であるドン・キホーテつまりアロンソ・キハーノもまた，騎士道物語を読みふけるまえは，もっぱら「狩り」や「家や田畑の管理」を生業としていたのである（『前篇』第1章）。

ところでスペインの場合には，近世社会を特徴づけるもう一つの重要な要素があった。中世盛期においてはキリスト教，イスラーム，ユダヤ教の三宗教が共存（convivencia）していたと言われるように，実際にはその内部ではキリスト教徒の側からのさまざまな差別が行なわれていたものの，キリスト教徒にとっての異教徒・異民族がイベリア半島で暮らしていた。しかし中世後期から近世初頭になると，スペインをカトリック王国（Monarquía Católica）として定立しようと努め，異教徒のキリスト教への強制改宗をすすめていった。そのなかでは，かつてのイスラーム教徒とユダヤ教徒，すなわち新キリスト教徒を，もともとのキリスト教徒，すなわち旧キリスト教徒と区別し，さらに旧キリスト教徒のさまざまな社団において「モーロ人やユダヤ人の血が混じらない」という規定を盛り込むことで，新キリスト教徒に対する差別と排除を行なっていたのである。新キリスト教徒はそれ自体で差別の対象となるとともに，彼らの従事していた特定の職業もまた差別の対象となったという。こうして近世スペインでは，身分制的編成にカースト的編成（擬似カースト的構造）が重なって，「出生（血）の純潔」と「生活の純潔」という二重の条件が高貴さには求められていたのである[12]。

こうしたカースト的身分制社会であったからこそ，血筋において怪しい貴族よりも，貧しい農民は古くからのキリスト教徒であるがゆえに「血の純潔」を誇ることができたという。島の領主になったら恩を忘れてしまうと揶揄されたサンチョは，反駁する。「（そういうことは）卑しい生まれの連中にはあてはまるけど，おいらがそうであるような，魂の上に先祖代々の古いキリスト教徒の脂身を指幅四つほどもつけてる者にはあてはまりゃしねえ」（『後篇』第4章）。そして，「おいらがいつでも神様を，そして聖なるローマ・カトリック教会がよしとして信じておいでのものすべてを，熱烈に心をこめて信じていること，また，実際にそうであるように，おいらがユダヤ人の不倶戴天の敵であること以外になんの取得もねえ男」であるとサンチョが自らを語ることで，正統キリスト教徒たることと「ユダヤ人」忌避とが表裏一体であることが明らかにされている（『後篇』第8章）。

そして，人びとが広くいだいていたユダヤ人とコンベルソ（改宗者）への差別意識は，セルバンテスにとって風刺と笑いの対象となりこそすれ，身分制的構造への姿勢と同様に，その差別を断ち切る論理には結びつかない。幕間狂言『不思議な見世物』では，「つまりは不思議きわまるものを観覧に供するので，いつしか不思議な見世物と呼ばれるようになったのでございます。いささかでも改宗したユダヤ人の血筋をひいていたり，正統な結婚をした両親を持っていないとか，そういう両親から生まれなかったとかいう人間は誰一人として，観覧に供せられるものの姿をみることができないのでございます」ということが狂言の柱になっている[13]。「模範小説集」の『ガラスの学士』にもこんな例がある。「ある時，たまたま彼（学士）が教会の入口にたたずんでいると，古くからの由緒正しいキリスト教徒の子孫であることを誇りにしている農民のひとりが教会に入らんとし，すぐ後からは，その素性にまつわる評判が先の男ほどよろしくない男がやってきた。それを見た学士は，先を行く百姓に向かって大声をはりあげ，こう言った ――〈おいおい日曜日よ，土曜日のやつが過ぎるまで待つんだ〉」。この言葉が学士の機智を示す事例として扱われているのである。

セルバンテスの作品には，改宗者忌避とともにカトリック的正統性へのこだわりが重なって現れる。前述の『不思議な見世物』でも「改宗したユダヤ人の血筋」と「正統な結婚をした両親を持っていない」こととが並列されていたが，『ガラスの学士』でも，書記といった要職に就くには「自由な人間」でなければならず，「れっきとした嫡出子のみに許される仕事であってみれば私生児や怪しげな血筋の者にはとても務まらない」，と語られている。実際に，当時のさまざまな社団への加入条件にも「血の純潔」と並んで「正統なる婚姻による嫡出子」であることが明記されていたのである。さまざまな風刺にあふれた『ドン・キホーテ』のなかでも教会は揶揄の対象となることはない。これは異端審問制度による監視の目が行き届いていたというだけではなく，カトリックたることはセルバンテスにとっても疑うことのない前提であったからではないか[14]。そしてカトリック的性的規範に反するとされた同性愛

者は，嘲笑の対象とされた。『ガラスの学士』のなかでは，触れ役が「（並んだ笞刑囚のなかの）うしろの男は」と言いかけると，学士はすかさず，「あの男は少年が好きだったに違いない」と言ったとして，「うしろ」と「尻」をかける才知を学士に見ているのである。また『ドン・キホーテ』では，「あの野蛮なトルコ人たちのあいだでは，どんな美しい女性よりも，きれいな少年あるいは青年のほうがもてはやされる」と述べて（『後篇』第63章），野蛮＝トルコ人＝性的逸脱という図式を描いているのである。

ところで，16世紀のセビーリャは大西洋交易を中心に繁栄して「ドン・ディネーロ」という言葉が流布したように[15]，かね（ディネーロ）にもとづく基準が伝統的価値を揺るがしていたことにも注意したい。サンチョによれば，「人の値打ちは財産次第，財産があればあるほど値打ちがあるんだから。うちの祖母様がよく言っていたように，この世にはただ二つの家系しかねえ，つまり，かねを持っているのと持たねえのの二つだね。……今日びじゃ，ドン・キホーテ様，世間の人は物知りよりも物持ちの方に御機嫌うかがいをするんだよ」ということになる（『後篇』第20章）。だが理想とされるのは，シエラ・モレーナ山中に身を隠した美しい娘ドロテーアの両親であろう。両親は，「百姓，つまりただの平民ですが，人聞きの悪い異教徒の血など一滴もまじっていない，世間でよく言う，酸っぱくなったほど古いキリスト教徒で，なかなかの素封家でしたので，その財力と立派な方々との交際のおかげで，徐々に人望を得て郷士となり，さらにはひとかどの貴族と見なされるようになったのでございます」（『前篇』第28章）。つまり，ここでは新キリスト教徒を排除する一方で，平民が富を蓄積することで社会的に上昇することは肯定的に描いているのである。

さて，モリスコ（イスラームからの改宗者）へのセルバンテスの眼差しを見ることは，彼が，グラナダのモリスコ反乱（1568〜71年）からモリスコ追放（1609〜14年）にいたる時代環境のなかに生きていただけに興味深い。まず注目されるのは，『ドン・キホーテ』のなかでは，1609年のフェリーペ３世によるモリスコ追放令にみられる「異端者，背教者，裏切り者」といったかたちでモリスコ全体を非難することはしていないことである。たしかにモーロ人に対するセルバンテスの言葉には容赦がなく，「モーロ人からはいかなる真実をも期待することはできない，なんとなれば，彼らはいずれも嘘つき，いかさま師で，策士だからである」とか，挙句の果てに「あのモーロの犬めが」という言葉を連ねている（『後篇』第３章）。だが，スペインに密かに立ち戻ったモリスコのリコーテの話をわざわざ挿入して（『後篇』第54章），「国王陛下のむごい布告に従って」追放されたリコーテに，一方では「仲間うちにとんでもねえ不埒な企み」を持つ者もいたので，国王陛下の決断には「それ相応の理由」があったと認めながらも，自分たちのなかには「実に信仰心の篤い，正真正銘のキリスト教徒もいたんだから」と言って身に降りかかった不幸を嘆かせているのである。しかもスペインに対する愛着の強さを示して，「わしらが生まれたのはこの地であり，スペインこそわしらの生まれ故郷なんだから」，そして「祖国に対する愛は甘く強し」とまで言わせているのである。

おそらくセルバンテスは，ムルシア地方のリコーテ渓谷のモリスコが，ロス・ベレス侯爵やムルシアの聖職者の，彼らはキリスト教徒となっているという嘆願にもかかわらず，結局は追放の憂き目にあったことを念頭において，この話を挿入しているのであろう[16]。しかし，キリスト教に改宗したモリスコへの同情があったことは否めないが，それ以上の寛容をみいだせるであろうか。セルバンテスは，モーロ娘が「正真正銘のカトリック」となるならば「祖国」スペインへ受け入れることにやぶさかではなかった（『前篇』第40・41章のソライダの話，『後篇』第63章のリコーテの娘の話）。まさに異教を排斥し異端を許さない「カトリック王国」がセルバンテスの「祖国」であったのである。遺作『ペルシーレスとシヒスムンダの苦難』（第３巻第11章）のなかでは[17]，見せかけの改宗者たるモリスコ追放の措置をとる国王に最大の賛辞を送っている。「その王の決断によってモリスコ追放の果敢な決意がなされるとか。腸（はらわた）をかじる蛇（くちなわ）を退治するとでも申しますか，小麦から麦なでしこを取り，畑から雑草を毟（むし）って駆除するようなものです。ご到着の早からんことを。幸多き若君よ，賢王よ，追放の勅令をためらわず行使し給え。この国が無人の荒野と化すことも何をか怖れましょう」。そして，1609年から1614年にかけてスペインは30万ものモリスコを国外に追放した[18]。結果，「すべてがカトリック教徒です」と教会の副助祭ハリフェに誇らせることとなった。この遺作『ペルシーレス』を書く段階にあっては，セルバンテスはもはや不寛容たることを躊躇ってはいなかったのである。

II 『ドン・キホーテ』出版300周年

セルバンテスの作品『ドン・キホーテ』は，出版当時から近代小説としての高い評価を受けていたわけではない。17世紀にはもっぱら愉快な書物ないし滑稽な書物と受け止められていた。18世紀になるとイギリス文学界がセルバンテスを洗練された風刺作家として捉え，『ドン・キホーテ』は単なる騎士道小説のパロディーではなく勝れた風刺的散文であるとみなされた。スペイン国内でも再評価がなされて，1780年にはスペイン王立アカデミーが豪華本を出版するにいたった。さらに19世紀にはロマン派によって，人間精神の葛藤をあらわす作品という新たな解釈がなされた[19]。こうして滑稽な騎士から，人間の高い理想を求めて決然と戦う悲劇の主人公へとコペルニクス的転回を遂げたドン・キホーテ像は，19世紀末から20世紀初めにかけての遅れた「スペインの再生」と，そのための国民的シンボルを模索する人びとにとって格好の対象となった[20]。

1903年12月２日，自由主義的傾向のジャーナリストのマリアノ・デ・カビアは『エル・インパルシアル（*El Imparcial*）』紙で1905年の『ドン・キホーテ前篇』300周年を前にして，「自分たちの血筋（raza），自分たちの言語（habla），自分たちの国民的精神（alma nacional）のもっとも素晴らしい栄光を称えて，これまでいかなる民族も催したことのないほど輝かしく壮大な祝祭が1905年に実現されることが必要である」という呼びかけを行なった。同じく自由主義的理念に立って国民統合の象徴を求めていたオクタビオ・ピコン，オルテガ・ムニーリョ（哲学者オルテガ・イ・ガセーの父）らの政治家兼評論家は，これに直ちに呼応した。『エル・インパルシアル』紙では引き続きキャンペーンが張られて，『ドン・キホーテ』を「国民的人物像」を表象するものと謳い，「わが民族の精神性を肯定する」つまりネーションとしてのスペインを肯定する「スペイン再生の大行事」が1905年に催されるべきであると主張した。とくに，1889年のフランス革命百周年祭をパリで目撃し，コメモレイションが国民統合にとっていかに重要であるかを知ったオルテガ・ムニーリョは，各方面に熱心な働きかけを行なった。この動きは大きな反響を呼んで，1904年１月，アントニオ・マウラ政府は，300周年祭のための特別評議会の設置を決定した[21]。

こうして祝祭の年として位置づけられた1905年５月には，国立図書館での大展示会を皮切りに数々の行事――出版パーティー，講演会，コンサートなど――が催され，国王や大臣の列席も行なわれた。さらに地方でも『ドン・キホーテ』にちなんださまざまな催しが組織されて，「自分たちの言語」で書かれた「国民的誇り」の名前は人びとの間に深く刻まれたのだった[22]。

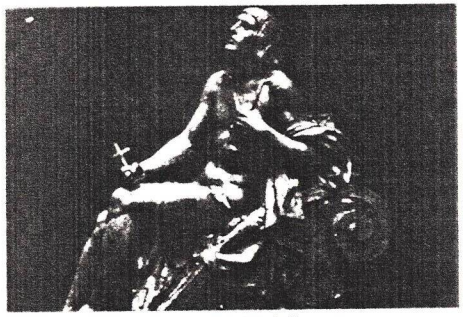
しかし，E.ストームが詳しく分析しているように[23]，公式行事の演説，あるいは文芸協会での講演，さらにはこの年に出版されたアソリン，ウナムーノ，ナバーロ・レデスマの書物の内容をみると，ドン・キホーテに「スペインの再生」を期待して，そこにひとつの人物像を読み取ることは不可能であった。すでに1903年の段階でマエストゥは，『ドン・キホーテ』は，「疲弊した者，年老いた者，衰えた者たちの書物」であり，将来のスペインのための再生には役立たないと批判しているが，この文学作品はじつにさまざまな評価を生み出してしまうのである。1905年に亡くなった小説家フアン・バレーラにとって『ドン・キホーテ』は，深読みの必要のない愉快な書物であった。保守的歴史家メネンデス・ペラーヨにとっては，やはり愉快な作品であるが，なによりもセルバンテスは「伝統的信条に忠実」であり，祖国，信仰，正義，社会的規律を守ろうとしていたと捉える。アレハンドロ・ピダルに至っては，セルバンテスはその「キリスト教的騎士道

精神」をこの書物に付与しようとしたのであり，スペイン民衆は「キリスト教民主主義」の具現者であったとする。すでに見たようにカビアやピコンにとっては，伝統を批判した作品『ドン・キホーテ』のコメモレイションは「スペインの再生」の鍵であったが，文学作品そのものへの深い洞察には関心がなかった。モラートらの社会主義者にとって，『ドン・キホーテ』は風刺の書以上の現状批判の書物であった。他方，アソリンとウナムーノは，文学的な思索をめぐらした。アソリンにとってドン・キホーテは，「痛ましき偉大な人物」であり，その生涯は「終わることのない，報われることのない闘い」であった。ウナムーノは，『ドン・キホーテ』は決して愉快な書物でも国民的再生のための書物でもないとして，独自のドン・キホーテ像の解釈にこだわった。そしてセルバンテスの伝記をまとめたナバーロ・レデスマは，『ドン・キホーテ』を伝統への批判とともに近代文明への批判の書として読み解こうとした。

したがって，ストームが言うように，1905年の300周年祭は，国民的統合の目的を達成したとは言いがたいものであった。「数多くの演説が行なわれ，そこには大っぴらな批判や論争はなかったものの，祝祭は国民的統合の明らかな例示とはなりえなかった。すべての人がセルバンテスの書物を称揚したが，それぞれがそれぞれ独自の解釈を強調したのであった」[24]。

この後，もし『ドン・キホーテ』がスペインの特定の「国民的精神」を表象するものと規定されるとすれば，それはもっぱら政治の力，政治的ナショナリズムの力によるものであった。別稿で論じたように[25]，20世紀前半のスペインの運命は，ナショナルカトリシズムに翻弄されることになる。1915年の『ドン・キホーテ 後篇』出版300周年，1916年のセルバンテス没300周年を経て，「セルバンテス記念碑」建立の動きが始まる。それはプリモ・デ・リベーラ将軍の独裁時代に着手されたが，同将軍が倒れて事業は中断し，スペイン内戦終了後に再開されて，1957年に完成を見た。現在，スペインの首都マドリードのスペイン広場にある巨大なモニュメントのことである。そしてこれには，フランコ体制につながる露骨なナショナルカトリシズムの象徴が備わっているのである。前掲の〔写真①〕の中央には女性が椅子に座っている。これは「文学（La Literatura）」〔写真②〕を表象するのだが，このやや下の左右両側にある像が，「神秘主義（Misticismo）」〔写真③〕と「軍事的勇敢さ（Valor Militar）」〔写真④〕なのである。軍隊と教会によって守られることによって成立した世界的（この塔の頭上に輝く「五つの大陸」によって象徴される）な文学，それが黄金世紀の作品『ドン・キホーテ』なのであった[26]。付言すれば，1920年の王令ではすべての公立小学校の教室では毎日この小説の一節を読むことが命じられたし，スペイン内戦後のカタルーニャ，バスク，ガリシアでの地方固有言語抑圧のポスターに書かれた言葉は，「スペイン，規律，セルバンテスの言語（lengua de Cervantes），万歳！」であった。

写真②　文学

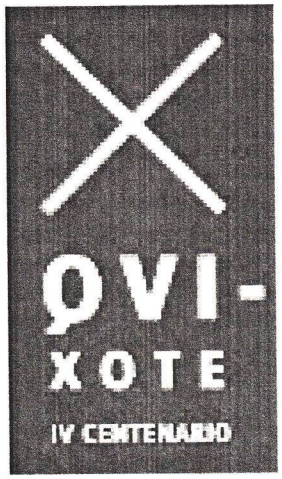


写真③　神秘主義

写真④　軍事的勇敢さ

おわりに ── 400周年における新たな動き

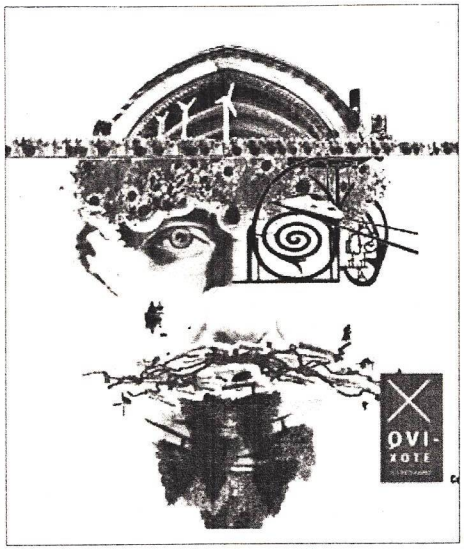
冒頭で述べたように2005年は，「ドン・キホーテ400周年」を多彩に祝っており，その結果がどのようなかたちで現れるかはいまだ分からないが，その統一ロゴマーク〔写真⑤〕が，国民的一体性を醸し出すとは思われない。いずれにせよ，19世紀末から20世紀初めのコメモレイションの時代と異なって，現在はあまりにも多様な文化表象にあふれており，かつて特定の記念行事開催，記念碑建立などが与えたような社会的影響力を期待することはできないだろう。ただ，そうしたなかで『ドン・キホーテ』を考えるうえで，そして現代スペインの抱える多言語・多文化社会の問題を考えるうえで，二つの新たな動きがあったことをこの時点（2005年7月）での証言として残しておきたい。



写真⑤　統一ロゴマーク

そのひとつは，5月19日から21日にかけてセビーリャで「地中海三つの文化財団」の主催で「セルバンテス，ドン・キホーテ，モーロ，モリスコ，アルハミアド」に関する国際シンポジウムが開催されたことである。「諸文化の対話が際立っている今日のような時代に，多文化的には困難で抑圧があったが同時に輝かしくもあった時代における一つの決定的な克服の事例を示す作家とその作品の諸相を分析する」ことが，このシンポジウムの目的とされている[27]。1992年の「アル・アンダルス500周年」と「セファラード500周年」[28]に引き続いて三つの文化の，畢竟，多文化の共存をめざす方向でのこうしたコメモレイションは，1905年の300周年祭の枠組みには決して入ることのないものであると言えよう。ただし，セルバンテスが明確に多文化主義的姿勢をとったと評価すると，本稿第Ⅰ章で論じたようにアナクロニズムに陥る危険のあることを指摘しておきたい。

もうひとつは，バルセローナ市歴史博物館で開催の「ドン・キホーテとバルセローナ」展（16/3/2005～9/10/2005）〔写真⑥〕で扱われた内容である。『ドン・キホーテ 後篇』第60～65章がバルセローナへの道中と市滞在を舞台にした話になるが，この展示ではそうした小説の筋を辿りながら当時のバルセローナの生活を再構成するとともに，その最後に1905年の「ドン・キホーテ300周年」がもった，バルセローナ及びカタルーニャ地方にとってのさまざまな意味を明らかにしようとしていることである[29]。ここでは，国家が主催するスペイン語文学のコメモレイションに対して，異なる固有言語を持つ地方の諸階層の同調や反発の諸相が，当時の新聞記事紹介を中心にして示されており，きわめて興味深い内容となっている。最近の歴史学の大きな関心の対象である，コメモレイションと記憶の問題を考えるうえで



写真⑥ イメージポスター

も貴重なテーマであると言えよう。

最後に，本稿はセルバンテスの文学者として価値を貶めるものではないことを断っておきたい。ドン・キホーテやサンチョの口で語られる処世訓は，珠玉そのものである。「水瓶が石に当たろうと石が水瓶に当たろうと，ひどい目にあうのはいつでも水瓶」というサンチョの言葉は，「領主様」とか「自分に命令するような者」とは事を構えてはならないということであるが，それは「庶民の知恵」の表白であろう（『後篇』第43章）。そしてわたしは，『ガラスの学士』によってつねに警鐘を発せられていることを記して本稿を終わりたい。人びとは，狂人となった学士が発する警句，因習に対する批判には耳を傾けるが，正気に戻った彼に忠告の言葉を期待する者はいないのである。私たちは，ときには狂人になる勇気をもたなければならないのだ[30]。

1) たとえば，牛島信明『スペイン古典文学史』（名古屋大学出版会，1997年）第11章，坂東省次・蔵本邦夫編『セルバンテスの世界』（世界思想社，1997年）を参照。

2) 国立文化コメモレイション協会の活動については，http://www.secc-es.com の HP を見られたい。我が国の企画には，スペイン大使館とスペイン文化省グラシアン基金の援助によるところが大きい。

3) 牛島信明『ドン・キホーテの旅』（中公新書，2002年），197-199頁を参照。

4) 坂東省次・蔵本邦夫編，前掲書，101-109頁を参照。

5) Feros, Antonio y Gelabert, Juan (dirs.): *España en tiempos del Quijote*, Madrid: Taurus, 2005, p.23.

6) *Ibid.*, p.11.

7) ナショナルデーとコメモレイションについては，拙稿 "Memoria pública y fiesta nacional", en Armangué, Joan (ed.): *Oralità e memoria*, Dolianova: Arxiu de Tradicions/Grafica del Parteolla, 2005, pp.59-71, 及び「帝国の記憶とスペインの国民国家」，松本彰・立石博高編『国民国家と帝国 ── ヨーロッパ諸国民の創造』（山川出版社，2005年），188-213頁，を見られたい。

8) 以下，『ドン・キホーテ』からの引用は，牛島信明訳（岩波文庫版）による。

9) セルバンテス（牛島信明訳）『模範小説集』（国書刊行会，1993年）に所収。

10) 『ドン・キホーテ』の置かれた社会構成体の特徴については，Vincent, Bernard: "La sociedad española en la época del Quijote", en Feros y Gelabert (dirs.), *op.cit.*, pp.279-307; Rivero Rodríguez, Manuel: *La España de Don Quijote. Un viaje al Siglo de Oro*, Madrid: Alianza Editorial, 2005, pp.48-69を参照。

11) Real cédula estableciendo la honradez de los oficios mecánicos (18/3/1783).

12) この点に関しては，拙稿「『スペイン王国』の成立とコンベルソ問題に関する覚書」，『Quadrante』（東京外国語大学海外事情研究所），No.1，1993年，142-154頁を見られたい。また，「血の純潔」規定の具体的事例として，拙稿「アンシャン・レジーム期のマドリード市会」，『もうひとつのスペイン史』（同朋舎出版，1994年），162-170頁を見られたい。

13) 『世界文学大系10 セルバンテス』（会田由訳，筑摩書房，1960年）に所収。翻訳文の引用に当たっては，原文を参照して一部変えてある（以下の引用も同様）。

14) Rivero Rodríguez, *op.cit.*, pp.446-464を参照。それと同時に，セルバンテスの作品で女性たちは，当時の教会道徳にしたがって，処女，貞淑，貞操を求められている。「ジプシー女」の主人公プレシオーサの「美しさとディスクレシオン（思慮や才知）」も，貞淑さが前提となる。

15) 関哲行・立石博高編訳『大航海の時代』（同文舘，1998年），133-139頁を参照。

16) リコーテ渓谷などのモリスコ追放について，Rivero Rodriguez, *op.cit.*, pp.198-204を参照。

17) セルバンテス（荻内勝之訳）『ペルシーレスとシヒスムンダの苦難』（上・下）（国書刊行会，1980年）。

18) モリスコ追放とその意味に関しては，Epalza, Mikel de: *Los moriscos antes y después de la expulsión*, Madrid: Mapfre, 1992を参照。

19) 牛島信明，前掲書，第2章を参照。

20) 以下，300周年祭とスペイン・ナショナリズムの動きについては，Storm, Eric: "El tercer centenario del Don Quijote en 1905 y el nacionalismo español", *Hispania*, LVII/3, núm.199, 1998, pp.625-654を参照。

21) 同じマウラが，1918年には「10月12日」を「ラサの日」として国民的祝祭日とした。コメモレイションの政治的効果を知っていた政治家であったと言えようか。

22) Sawa, Miguel y Becerra, Pablo (dirs.): *Crónica del Centenario de Don Quijote*, Madrid: Antonio Marzo, 1905を参照。この行事の内容については，別稿で紹介したい。

23) Storm, *op. cit.*, pp.637-654を参照。

24) *Ibid.*, p.653.

25) 注7の拙稿を見られたい。

26) この記念碑については，Salvador, María del Socorro: *La escultura monumental en Madrid*, Madrid: Alpuerto, 1990, pp.458-471を参照。スペインのナショナルカトリシズムにとっての理想の君主であるイサベル女王に捧げられた記念碑（1883年建立）でもやはり，女王が軍隊と教会を象徴する大司令官とメンドーサ枢機卿によって囲まれていることは興味深い。*Ibid.*, pp.44-52を参照。なお，〔写真③〕と〔写真④〕は，それぞれ *Ibid.*, p.471に掲載の彫像ひな形である。

27) Sociedad Estatal de Conmemoraciones Culturales: *Boletín digital*, n.16 (9/5/2005) を参照。

28) 拙著『スペイン歴史散歩』（行路社，2004年），24-46，114-119頁を見られたい。

29) バルセローナの展示についてはカタログも出版されているが，残念ながらこの「300周年祭」についての部分の紹介が掲載されていない。Riera, Carme (ed.): *El Quijote y Barcelona*, Barcelona: Museu d'Història de la Ciutat, 2005.

30) 1944年に渡辺一夫は，「びいどろ学士」という名文を綴っている。これは会田由訳『セルバンテス短篇選集』に収められた短篇『びいどろ学士』（「ガラスの学士」のこと）を紹介するかたちで，軍隊に召集された教え子に対して戦時下日本で文学者のおかれた気持ちを率直に伝えるものである。『ちくま日本文学全集 渡辺一夫』（筑摩書房，1993年），14-20頁を参照。

編集後記

＊「特集セルバンテスの時代」について

『スペイン史研究』は，1983年の発刊以来，第4号「スペイン内戦50年」を例外として，特集号を組んできませんでした。しかし，周知のように，2005年はセルバンテス『ドン・キホーテ』第一部刊行400年にあたり，スペイン内外でさまざまな記念行事が催され，歴史研究の分野でも，当該時代について集中的に研究が行なわれています。『スペイン史研究』も，こうした流れに棹さす必要があるのではないかと考えました。また，スペイン大使館文化部も，セルバンテス年にちなんだ記念事業に力を入れています。これまで大使館から多くの助成を受けてきたスペイン史学会としても，これに協力するのがふさわしいと思います。このことは，引き続き，大使館に対して助成金を申請するためにも，有益なことではないかと考えました。

もちろん，『スペイン史研究』が研究者にとって，とりわけ若手の研究者にとって，開かれた発表の場となるように，との発刊の趣旨を変更するものではありません。「特集」論文以外の論考を掲載したのは，そのためです。どのようなかたちで「特集」を組んでいくかは重要な問題であり，委員会は今後も慎重に検討していくつもりです。ご意見があれば，委員会までお寄せください。

本号の発行には，スペイン大使館より助成金を得ることができました。ここにあらためて深謝します。また，本会の研究活動に対して，津田塾大学国際関係研究所より助成金を得ております。このことにも感謝の意をあらわしたいと思います。これまでどおり，『スペイン史研究』および本会『会報』の発行に際して，創研出版の中村健一氏にご尽力いただきました。

La edición de este número ha contado con la ayuda de la Embajada de España en Japón.

※『スペイン史研究』のバック・ナンバー購入ご希望の方は，お葉書か，電子メールにて，希望号数や送付先等を明記のうえ，委員会宛にお知らせください。
（メールアドレス：sjdhde@attglobal.net）

＊スペイン史学会への入会を希望される方，定例研究会の通知を希望される方は，下記委員会までにご連絡ください。入会申込書をお送りいたします。

スペイン史学会委員会
〒480-1198 愛知県愛知郡長久手町
大字熊張字茨ヶ廻間1522番3
愛知県立大学外国語学部　奥野研究室気付

＊スペイン史学会ホーム・ページ
http://wwwsoc.nii.ac.jp/sjhe/
研究活動の紹介をすると同時に，スペイン史研究文献データベースを提供しています。

スペイン史研究　第19号　2005年12月25日　発行

編集・発行者　スペイン史学会
代表者　中塚次郎
〒480-1198 愛知県愛知郡長久手町
大字熊張字茨ヶ廻間1522番3
愛知県立大学 外国語学部 気付
郵便振替 00130-4-94414

製作・発売者　創研出版
代表者　中村健一
〒830-0038 福岡県久留米市西町432-5
TEL.0942-22-0541 FAX.0942-22-6371
郵便振替 01750-7-6417

© Supeinshigakukai, 2005: Printed in Japan

Sumario

(Reflexiones) La obra literaria y su tiempo:

La conmemoración del Cuarto Centenario del *Quijote*

por　Hirotaka　Tateishi

El año 2005 corresponde al Cuarto Centenario de la publicación de la primera parte de la obra de Miguel de Cervantes: *El Ingenioso Hidalgo Don Quijote de la Mancha*. Este hecho nos obliga a plantearnos dos problemas relacionados con la obra literaria:

1) La relación del autor con el tiempo en que vivió y
2) El significado del hecho de conmemorar la publicación de la obra en el contexto político e histórico en que vivimos.

En cuanto al primer problema, estoy totalmente de acuerdo con la opinión de Antonio Feros y Juan E. Gelabert, según la cual "no se puede entender el *Quijote* sin entender el periodo, el contexto histórico, la vida y aventura de su autor, don Miguel de Cervantes". Porque Miguel de Cervantes no es en ningún sentido ajeno a "las ansiedades e inquietudes de la España de principios del siglo XVII, las mismas que el *Quijote*, con inmensa vividez, recupera, repite y transforma", según Georgina Dopico Black. Por consiguiente, el *Quijote* no es una obra que incluya contenidos relativos a la "democracia" o al "espíritu de tolerancia", como apuntan algunos literatos, sino una obra plenamente hija de su tiempo: el Siglo de Oro, un tiempo lleno de conflictos, que, de acuerdo con el concepto que formuló ya hace tres décadas J. I. Gutiérrez Nieto, correspondería al de la sociedad castizo-estamental.

La sociedad estamental se basa en la armonía corporativa, de modo que Sancho Panza satiriza la doctrina, "*quando caput dolet caetera membra dolent*". Sin embargo, tanto para Don Quijote como para Sancho Panza, la cabeza y los miembros son indispensables para formar la sociedad (*El Quijote, 2, 2*). Y la nobleza debe ser ajena a los oficios mecánicos y viles. Así, el propio hidalgo, don Quijote, vive de "la administración de su hacienda" (*Q, 1, 1*).

Para la sociedad estamental de la España del momento, hay otro elemento que refuerza el orden vigente de la sociedad, cual es la "cascada de desprecio" no sólo de los oficios, sino también de los orígenes étnicos y religiosos de cada miembro. Desde fines del siglo XV, en España no existe otro miembro de pleno derecho en la sociedad que el cristiano, por ello se sigue despreciando a los nuevos cristianos o a los que no son "limpios de sangre de moro y judío". Dice Sancho: "y cuando otra cosa no tuviese sino el creer, como siempre creo, firme y verdaderamente en Dios y en todo aquello que tiene y cree la santa Iglesia Católica Romana, y el ser enemigo mortal, como lo soy, de los judíos, debían los historiadores tener misericordia de mí y tratarme bien en sus escritos" (*Q, 2, 8*). Es cierto que Sancho siente dolor hacia la suerte del morisco Ricote y su mujer e hija. Pero, con tal de que sean "cristianos firmes y verdaderos" (*Q, 2, 54*).

En la historiografía reciente, el régimen de la época moderna se suele denominar "Monarquía Católica". Debemos contrastar el ideal de la comunidad religiosa católica con la intolerancia hacia otros grupos étnicos y religiosos diferentes al católico.

En cuanto al segundo problema, para poder reflexionar acerca de él, contamos con el estudio de E. Storm sobre el tercer centenario del *Quijote* en 1905. Según este autor, la celebración se planteó desde el punto de vista del interés nacionalista, y, "aunque se pronunciaron muchísimos discursos, y faltaban críticas y polémicas abiertas, la fiesta (en 1905) tampoco fue una clara muestra de unidad nacional. Todo el mundo alababa el libro de Cervantes, pero cada uno enfatizaba su propia interpretación".

Por consiguiente, si el "Monumento a Cervantes" ubicado en la Plaza de España en el centro de Madrid representa la trinidad de "La Literatura", "El Misticismo", y "El Valor Militar", no es sino el fruto del nacional-catolicismo basado en las fuerzas del Ejército y la Iglesia en la primera mitad del siglo XX español. Tenemos que traer a la memoria el anuncio de los carteles pegados en las paredes, después de haber entrado victorioso el ejército franquista, en las regiones con lenguas propias (Cataluña, Galicia, País Vasco, etc.): "España, la Disciplina, y la Lengua de Cervantes, ¡Viva!", o "Si eres español, ¡habla la lengua del Imperio!"

En cuanto a la celebración del Cuarto Centenario del *Quijote*, aún no podemos pronosticar nada. Pero hay una actitud fundamentalmente contraria al tercer centenario y los actos posteriores que culminaron en el "Monumento a Cervantes". En Sevilla se celebra el "Encuentro internacional: Cervantes, *El Quijote*, lo moro, lo morisco y lo aljamiado", en el cual se valora "un ejemplo decisivo de superación en una época multiculturalmente difícil y reprimida", para promover el diálogo entre culturas.

Una escritora laica que glosa el paternoster: Isabel Ortiz

por Hiroshi Sakamoto

Este presente ensayo se trata de Isabel Ortiz, una casada, que glosó el paternoster e incluso intentó publicarlo. Por este motivo, fue detenida por la Inquisición de Toledo en 1564. En aquella época, para que una mujer escribiese, tenía que ser una religiosa y se necesitaba el mandamiento de superior o confesor. Entonces, sería un intento muy atrevido que una mujer laica, sin mandamiento de ningún varón, glosase las palabras de oración.

Los inquisidores sospechaban su parentesco con el franciscano Fray Francisco Ortiz, procesado por alumbrado en la década de 1530, pero no llegaron a constatarlo. En cualquier caso, lo cierto fue que nuestra escritora se movía en el mismo ambiente que el de los alumbrados de Toledo ya que servía a la Duquesa de Infantado igual que los alumbrados servían a los Mendoza. Las coincidencias entre ellos eran más que claras: la afirmación de la supremacía de oración mental sobre oración vocal; acendencia judía. Aunque ella negase su orígen converso, en el archivo del tribunal se conservaba la sentencia inquisitorial contra su bisabuelo paterno procesado por judaizante.

Su marido se fue a las Indias hacía dieciocho años y no volvió. Sin que constase su muerte, no era viuda.

O sea no podía volver a casarse ni meterse en el convento. Durante su ausencia, queda en un estado suspenso sin poder elegir nueva vida. Tal vez esta situación influyese en su dedicación a la práticica religiosa y decisión de escribir un libro.

Según declaró ella misma ante el inquisidor, la razón por la que escribió su libro fue que los libros espirituales que leyó tales como los de Luis de Granada, Constantino Ponce de la Fuente, Erasmo y Francisco de Borja, le parecieron tan largos que determinó de recopilar lo más necesario de los dichos libros. Su libro manuscrito se lo dedicó a la Duquesa de Infantado. Según decían, todos los jesuitas de Alcalá de Henares lo leyeron. Se lo enbió a los universitarios de Alcalá y al comisario del Santo Oficio para que diesen la licencia de imprimirlo. Se la dieron con la condición de que no se pusiese por autor el nombre de una mujer. Por el momento no lo publicó porque se esperaba un catalogo de libros prohibidos en que se quitarían los libros semejantes.

El comentar sobre las palabras de la Biblia era una manera bastante general de escribir libros espirituales. A lo mejor Isabel Ortiz adoptó este estilo para escribir su libro. Sin embargo, en estos "tiempos recios", era una émpresa muy atrevida y peligrosa que una mujer lo hiciese. El intento semejante lo hizo Teresa de Jesús cuando escribió *Las meditaciones sobre los Cantares*, pero su confesor dominico le mandó que lo quemase. Especialmente a partir de 1559, el año de la publicación del catálogo valdesiano, el arresto del Arzobispo de Toledo Bartolomé de Carranza, y el auto de fe de protestantes vallisoletanos y sevillanos, se les iba suprimiendo a las mujeres la posibilidad de enunciar la voz. En la segunda mitad del siglo, los libros de autores femeninos no se publicaron excepto los de Santa Teresa. Ésta podía escribir porque aparentenmente se comportaba obediente a los superiores.

A diferencia de otras escritoras religiosas, Isabel Ortiz no justificó el escribir un libro por el mandamiento de superior ni confesor. Lo hizo por su propia voluntad sin ningún mandamiento masculino. A una mujer que estubiese familializada con la cultura de Mendoza, resultaría muy natural ocurrirsele la idea de escribir un libro. En Guadalajara, hubo el salón de servientas a los Mendoza, al que pertenecía ella. Las mujeres de Mendoza sabían leer y escribir latín.

No sólo dentro del salón de Mendoza, sino fuera de él, fue rodeada de mujeres. Vivió junto con su hija única y cuidó de las hijas de su conocido. Su marido al que tuvo que obedecer estuvo ausente. No tuvo superior de la Orden al que tuviera que someterse. En este ambiente femenino, escribir sería un acto autonómico sin necesidad del mandamiento masculino.

Argel en el tiempo de Cervantes:
A través de *Topografía e hitoria general de Argel* por Antonio de Sosa

por Jitsuko Masui

Cervantes, cautivado cerca de la costa catalana por los corsarios berberiscos cuando regresaba a España en la galera Sol, en septiembre de 1575, iniciaba un período de cautiverio que no había de concluir hasta 1580. Esa etapa de su vida dejó huellas indelebles en su posterior producción literaria, tal como lo reflejan